

---

# 探し物は何ですか？

マーヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探し物は何ですか？

### 【Nコード】

N4250L

### 【作者名】

マーヤ

### 【あらすじ】

安西優里 16歳。都立高校に通う華の女子高生。

趣味は外国語、貯金、そして美形ウォッチング。

ごくごく平凡な家庭に生まれ、ごくごく平凡な容姿をしていて頭もそこそこ、運動は中の上、くどいようだが、ごくごく普通の女の子。

普通を愛する女の子なのだが。。。

近々、美青年にストーキングのように追われる予定。。。

将来の夢。平凡。

## 運命の日（前書き）

プロットなしの 勢い矛盾上等小説ですのであしからず。

## 運命の日

人は何かしら何かを求めているのだという。

時に、夢を

時に、幸せを

時に、愛を

しかしながら、

人生とはうまくいかないもので

人は愉快に笑う

人は涙をのむ

生きるという事は嬉しい事半分悲しい事半分なのである。

このお話は

不幸でも幸せでもどちらともいいづらい平凡の少女のお話

．．のはず。

探し物

安西優里はごくごく普通の女の子。

少し裕福な家庭に生まれ 上に二人の姉と兄がいる。

+ 愛犬1匹。

母は専業主婦、父は不景気による会社の合併や倒産で

今はただのスーパー雑務

今をなんとか生きているごくごく平凡の家族で生活している

ごくごく普通の女の子なのだ  
決して非凡ではない。一芸もない。

くどいようだが 安西優里は凡人だ。容姿も並。頭脳も並。運動は  
まあよしとしよう

ごくごく普通の女の子だ

どたどたどた ばたーーん

走ってくる音が聞こえたらすぐに自分のいる教室のドアが勢い良く  
あけられた

「優里。ほうかにノートかしてらー」

毎度のこととはいえうるさい。

「茜さん。。毎回うるさいからやめてほしいのですけど？」

苦笑しつつノートを机からだし茜と呼ばれた少女に手渡す。

「ごめんつて。いや でも 次のクラス 太田ちゃんだらー。優里  
のノートわかりやすいからさー」

「とかいいますけど。。茜さん。私とあなたの学年違っってこ  
とわかってます？」

「でもでもー 優里ちゃんお手製英語ノートに学年は関係ないのよ  
？ てことでまたあとで」

「はいはい。今日の放課後、バイト前にクレープね！」

ひらひらひらと手をかえす

安西優里 16 歳。都内県立高校に通う華の女子高生。彼氏なし

趣味は外国語、貯金

「ほんと優里外国語好きだよね。」

カフェにて先ほどかったクレープをほおぼる二人

「うん。だって 楽しいよね。言語ひとつおぼえるだけで 見た目  
がまったく違う人と楽しく会話できるんだよ？お金をためること以  
外でこれ以上楽しい事はないとおもっ！！！」

外国語！お金！ともしあがつてる優里に　茜はカフェの窓をさして  
道があるいている人をさす

「じゃ　あれは？」

「キターーーーーー？美形！　美形もね　うん　盛り上がるよね  
見てて癒されるよね！」と　優里の目は街中をあるいている美形二  
人組にそそがれる　そんな様子をみて茜は苦笑する

「癒されるだけ？毎度思うねんけど　付き合いたいとはおもわへん  
の？」

「んーーーーー。　なんていうか　それとこれは別っていうか」

「まあ　わかるけど。。。　あつ　ダーリンから電話。。。　ごめ  
ん　ちよつと外すね」

と茜は席をたつ

茜を見送って　残ったクレープをたべつつ　引き続き先ほどの美形  
を観察している

（ほーんと　かつこいいよねー　あの二人。　モデルかなんかな？？  
でもK高校の制服だし　あそこそいうの不歓迎だよなー。  
きつとファンクラブとかあるんだろうねー

あんな美形を彼氏にすると大変そう。。

漫画の読み過ぎかもだけど　集団リンチとかあったりねー

うわー　やだやだ　やっぱ　美形はみてるにかぎるよね　ワラ  
あつ　クレープ食べ終えちゃった。。

それに　そろそろ時間だ。。　美形観察してるひまないや  
急いでバイトいかなきゃ。。。　遅刻しちゃう）

と　茜がかえってこないが　そのまま　レジに残った友人が支払い  
する事を伝え　バイトにむかった

街中にて

「なー　海斗。　さっきのカフェで俺らの事　眼視していた女の子す

げーな。あの様子じゃ瞬きしてねーんじゃねーの？すっげー俺らモテモテじゃん ワラ」

「ン？そんな子いた？」

とスルーしていた。

どうやら全くきづいていなかったようだ

「あのなー お前 俺より見てくれないのに なんで そんなに女に興味ないんだよ だから 俺も あっち系？って疑われるんだよ。。。」とこゆびを少したて手を口もとまでもっていき ゲイジエスチャーをする。。。

どうやら海斗とよばれた美形2人組のうちの一人は女の子にはきょうみがないようである。

「んなことねーよ。。。」

「どうだか？」

「あのな俺にだって、好きな子ぐら・・・」

急に海斗の台詞がとまり怪しくおもった由貴夜は、  
『ん??』

つと、海斗の視線をたどる・・・。

そこには先ほどの女の子 そう 安西優里がいた

「あつ さっきの眼視してきた女の子。。。」 なに？あの子がお前のこれ？」

と小指をたてる

「いや 違う。。。でも そうなるといいな。。。」

と今までクールだった海斗はどこにもいない 恋する乙女

いやいや 恋する青年がそこにいた

そんな海斗をみて あんぐりする

なにやら嫌な予感がする由貴夜は、一歩また一歩後ろにさがって海斗から逃げようとする・・・

が



海斗は由貴夜の腕をがしつと捕まえて

「もちろん 協力してくれるな？」

とキレイな顔をしてすこんできた。。

いくら由貴夜が美形でも海斗はもっと美形なのである

「はい。。。」

美形がすこむと いやはや 般若のごとくおそろしいものなのだ。。

こうして海斗の追っかけがはじまろうとしていた

そして そのターゲットはごくごく平凡の女子高生安西優里だった

安西優里 16 歳。 都内県立高校に通う華の女子高生。 彼氏なし

趣味は外国語、貯金 美形ウォッチング

近々、ストーキングもどきに悩まされる予定。

そして

いつのひか 彼女の将来の夢は 平凡。 になるのだ・・・

## 運命の日（後書き）

初です。

よんでくださりありがとうございます。

感想とかおくってくださいと 大変嬉しいですよ!!!

プロットなしの 勢い書きなので矛盾とか一杯でてくるとおもいますが

暖かく見守ってほしいです。

足音は知らないうちに近づいてるんです

運命というものは 気づかぬうちに廻っているものなのです。  
海斗美声年にターゲットにされ かれこれ1ヶ月・・・  
(ごめんなさい いきなり月日が流れて。)

安西優里16歳。

ただいま趣味の貯金のためにバイト中。

「優里ちゃん 次 こっちおねがいできる？」

「あー 先輩、 次僕んとこ先でおねがいしますよー 優里ちゃんおねがい!!」

「安西」 それおわたたら ちよつと こっち手伝ってくれ」  
なにやら ご指名いっぱいな安西優里16歳 趣味外国語。

「あのー今日からヘルプ担当じゃなくなったので すみません。各自、自力でがんばってください！ 本当ごめんなさーい。い。では」

とデスクから移動し 隣の部屋にこもり仕事を続行している

安西優里 趣味外国語は、幸運にも大企業のオフィスで簡単な翻訳  
+ 書類作成を週3でバイトしているのだ。 未だに彼女は どうしてこんな大企業で ただの高校生がバイトできているのかが謎だか時給も待遇も 今後のキャリアとしても最高なので バイトを続けている。

隣の部屋で一人もくもくと翻訳作業や書類作成を行っている優里を  
みながら

オフィスのOLまたはサラリーマンたちはつぶやく

「ほんと 真面目よねー」

「ですね。でも高校生なのにすごいですよね。」

「この前 ロシア語のことを彼女と喋っていたら あのご英語だけじゃなくロシア語もイけるみたいで。。なんか凹みました。。」  
「でも すごいのは外国語だけなのよね。書類作成まかすと何かしらポカやってるのよ あの子。。。」

「あつ 何気に多いですよ 高校生で あんなに必死になってやってるから あんま僕いえないんですけど、、」

「私も。」

「あつ この前 電話対応で ペラペラと喋っていてすごい！って おもったんですけど 会話をがんばって聞き取ると 仕事から脱線してたり。。」

「あるわね。。」

「そうそう！僕 ちょっと 焦りましたよ！」

「でも そのおかげで 何本か契約とれたりしたんですよ 確か・。。」

「そうね よく覚えてるわね 柏木君。」

「いやー 柏木君だけじゃなくても みんな覚えてると思いますよ先輩」

「確かに。都ちゃんの言う通りね。。。あの契約だけは会社におおいに貢献したのよね」

「そうそう」

「で！ 彼女の時給あがったんですよー」

「ええ！？僕 その会社からスカウトきたってききましたよ！」

「ああ そういう噂もあったわね」

「「でも たしか。。。」」

「学校や家から遠くなるから断ったのよね」

「この会社より大きな会社だったのに。。。」

「でもでも 先輩 彼女 外国語以外微妙ですよ。。。」

「「。。。。。」」

「そうなのよね。でも 彼女、外国語は 英語 ロシア語 フラ

ンス語 イタリア語 スペイン語できるのよね だから 一度に4、5度美味しい ってかんじになってるのよね。」

「僕 この前 ドイツ語今学び始めたんですよー ってきましたよ」

「私 韓国語やってみようかな？ って ききましたよ・・・」

「あの子 外国語好きをこえて 外国語マニアというか。。。」

「先輩 私 なんでそんなに外国語好きなのか 一度きいたんですけど。。。」

「なんで??」

「あつ 僕も気になります」

「最初はまともな理由だとおもったんですよ 言語一つで容姿のまったく異なる人と楽しく交流できるから素敵ですよー! って でも どんどん 聞いていくうちに わかってしまったというか。。。」

「なに!??」

「彼女、美形ウォッチングが趣味らしくて。。。」

「あーー」

「つまるところ。。。」

「外国の美形をみるため 喋るために外国語を覚えたってかんじかしら?」

「まあ。。 苦笑」

「なんというか すごいですね 彼女。。。」

「度を超えてるわね」

「でも理由が不純でもあそこまで極めるのは・・・」

「「「・・・」」」

「仕事に戻りましょうか」

「そうですね」

「はい。。。」

ほとんど同僚の会話だけだったが 彼女のバイト先での様子は理解できたと思います。

ええ そうなんです 彼女は外国語ラブなんですが 凡人故ミスがおおいのです。

で バイト帰りは 仲良しの茜に電話するのです

トルルルルr。。

「はいはい？ダーリンと今頃ラブラブだったはずの茜ですけど？」

「私。」

「あー 俺俺詐欺系はご遠慮しときまーす」プチ

トルルルルル

「茜さん ひどいですよー 切らないでくださいよー！」

「だって 私も今腹が立つてて 愚痴きいてる暇ないもの。」

「！？ どうかしたんですか？」

ふだん なんだかんだ愚痴に付き合ってくれる茜が 愚痴に付き合ってくれないという事に驚き茜の話をきこうとする

「別れたの（怒）」

その一言でかなり同様する優里

「！！！！なんで？あんなにラブラブだったのに。。。」

「それは うちがききたいっちゅーねん。 もう ホント最悪。」

「彼氏募集中の私にとって なんて声をかけたらいいのか わかりませんけど。。。」

やけ食いで ケーキバイキングいきます？」

「そうね あんな男 こっちから願い下げやねん よっしや

じゃー 明日 橋本駅のケーキバイキングいこうや！」

「いいですね！ちよっと 遠いけど いきましょー！」

「まあ つもる話は 明日っちゅーことで おやすみー

ああ きいつけて 家にかえるんやで！ じゃね」

「はい。気をつけますね　おやすみなさい。」

30分後　優里は無事帰宅

「ただいまー」

愛犬の熱い抱擁　いや　タツクルに少し重心をくずしながらも家のなかにはいつていく

「おかえりー　ご飯できてるからねー」

「ごはんなに？」

「ピザ」

母が答えるよりも　兄が素っ気なく返答する

「ああ　お兄ちゃん　かえってたんだ。。。」「

「悪いか」

「いや　だって　いつもいないじゃん。」

普段なら　もう少し遅く帰宅する兄、秀がいることに驚きつつもゆっくりと食卓にむかい椅子にすわる優里

「話せば長くなる。。。」「

素っ気ない兄がそういうと　話は最低一時間はかかるということ  
前回の教訓を覚えていた優里は話をスルーしたが

後々　あのとき聞いておけば！と後悔することは　今はだまっておこう。。。」「

「あつ　秀ちゃん　今日　かつこいい二人組みたのー　あれ　絶対  
ファンクラブあるわー」

「またか　お前も　いいかげん　美形観察なんてせずに　一人の男  
だけを観察しろよ」

と妹の美形好きに難色をしめしつつも　反応をたのしんでいる  
「てか　たしか　秀ちゃんのまわりって　かつこいい人おおいよね  
ー」

「類は友をよぶんだよ」

その一言に優里は　食事が喉につまりそうになった

「！！！！　ッホン　ンン。。。」「冗談きついよ。。。」「

「……」

「秀ちゃん 全然かつこよくないから」

（ガーン）

何気に凹む兄 秀であつた

凹んでいる兄をよそに 優里はたんと食事をおえ 教育番組の語学講座を見終わると部屋にもどり宿題をしてねたのであつた。。

何気に凹んでいる秀に おいうちをかけるように

中学時代の友人 今は 別の高校にかよっている由貴夜からの電話に兄 秀は睡眠不足になったのだ。。

『おい 秀 きいてくれよ!!』

電話越しで鳴き声で助けをもとめようとする由貴夜

「なんだよ。。。」

『さつき いった海斗のことだよ!』

「またか。。。」

そう 由貴夜は食事前に海斗の恋愛事情のことで うだうだ話をきかされていたのだ

『あいつ まじこえーよ! あの女の子まじ かわいそうだし 犯罪一歩すれすれなきがする』

「今度はなんだよ。。。」

『あいつ なかなか 子猫ちゃんがみつからないからって どんどん機嫌がわるくなって クラスじゃ 登校拒否するやつもでてきて。。。 担任は見て見ぬ振り んで!親友の俺に なんとかしろとか うだうだうだ かくかくしかじか。。。』

由貴夜がしゃべりだして かれこれ2時間

「わかった つまるところ なんも手がかりない状態に海斗くんとやらは平常心をたもてない」と

『まあ なんとこころ。。。』



「ひとついつていいか。。。？」

『ん？』

「俺は海斗というやつとは無縁だ！ 無関係だ！ 頼むから 俺の睡眠時間をへらすんじゃねー！！！！！！ 怒」

『おま！ 大親友をみすてるのか！』

「大親友なら 俺のことも考えて 電話しろ 毎日毎日うだうだ2時間はしゃべりやがって」

そうなのだ

由貴夜はなんだかんだ 毎日電話しているのだ 最低2時間1ヶ月はそんな状況で さすがに 温厚な秀も堪え難く。。。。

「二度と海斗というやつので電話すんじゃねー！！！！」 プッ。

そのままベッドに眠りについた秀とは 裏腹に

由貴夜はという。。。。

電話からきこえる プーップーップーという機械音に絶望をかんじていた

「まじかよ。。。 俺 まじで海斗の親友やめてー 涙」

彼の悲鳴は 静かな夜に ただただ むなく響いただけでした。。。

「ところで 由貴夜君。彼女のがかりかなにかつかんだかな？」と ニコニコ笑う海斗に 顔をひきつりながらも答える

「そもそも 俺だって あのとときの彼女 よく覚えてないんだから。。。学校だってわかんねーし・・・」と続けようとしたが

「（ニコニコニコニコ）」



足音は知らないうちに近づいてるんです（後書き）

えと まだ 海斗と優里はであいません

次に 海斗は優里を発見し おっかけがはじまるとおもいます

てか 本当 文章ばらばら でたらめ 適当でごめんなさい

おもいつきのままに書いてるので。。

でも 楽しんで読んでくれていたなら幸いです

引き続き応援よろしくおねがいします

## 人生が変わろうとする日。

学校帰り 2人組の女子高生がカフェでまったり会話する。

ごくありふれた日常の1コマである。

「で、なんでふられたんですか？いつもなら振るほうなのに。。」

「とケーキを食べながら仲のいい一つ上の先輩 茜に訪ねる

「うちもいまだ よくわかってないねん」

とポツポツと電話での状況を話し始める

「ほんまにいつものように電話しとってん 一樹と。。。」

と語り始めた・・・

ああ 一樹っていうんは うちの愛しの彼氏な 今じゃ元カレやねんけど。。。

一樹は ほんまいい男やねん あそこにおけるイケメンみたいにと

と茜が指をさした方向には この前の美形二人組の一人がいた

(あつ この前の美形A・・・)

優里はケーキを食べながら 茜のさした男を見た

どうせ自分のこととは思わないだろう いつもみたいに 美形A  
をみながら手をふってみた

反応はないだろうとおもっているの で 茜の回想話に集中する

「でまー 一樹がいきなり だまりこんでさ なんや？つておもつ  
て 話をきいていくうちにな

あいつ こんなこというねん 『僕、茜ちゃんのこと大好きだよ  
本当に好きだけど でもやつぱ

自分の身がかわいいんだよ！ごめんだけど ちよつとの間距離を  
置こう いや ちよつとの間だけ  
別れてほしい』つて。。。 意味わからんやろ？」

なんていう身勝手な男なのか。。。 優里はあきれた

「意味わかりませんね その男。 というか むしろ そんな男と  
は別れてしまえ！！！」

「と 思うやろ でも やっぱ好きやねんつて。。。。」

「。。。。別に 茜さんがそれでいいならいいんですけど。で理由きいたんですか?」

「なんとかな。じゃあ一言でいうと 学校の王子が一目惚れして片思い中やから 幸せにはなったらあかんのやってさ・・・」

学校の王子が片思い中

えー つまり、 学校で一番人気な たぶん崇拜されているような人が身をさくような片思いをしていると?

・・・

「何ですか それ。。。別に 関係ないと思うんですけど」

「普通は そうおもつやろ!でも 違うらしい。。。 一樹がK高校ってしってるやろ?」

「なんかK高校の王子はものすご美形で 影響力があるらしいねん・・・」と

「またもや説明しつつかたりはじめた茜さん

へーへーへー 3へーでじゅうぶんだ!

要約すると

王子の片思いが成就するまでは まわりがとばっちりをくらうと

なんというはた迷惑なわがまま王子なんだろうか。。

話を聞く限り

茜さんの元彼も協力してるっていう話だし。。

なんでも一番の犠牲者は 斉藤先輩というらしい。。

この先輩もかつこいらしーが 別に 自分のしったことではない。

なにせ 美形と自分は別世界の人間なのだから。。

優里と茜が喋っている間

外では。。

海斗のテンションに苦笑しつつ ついていけない由貴夜がいた

「由貴夜！！！！ありがとう！！ヶ月かかって やつと彼女と再会できた」

いや まだ 再会してないだろ。。。。 ただ発見しただけだろうに。。

と 由貴夜がそんなことおもってるとはしらず ただ一人暴走しはじめている海斗

「ああ！ 今 彼女手をふったね あれは きっと 僕に手をふってくれたんだよね！」

いやいやいや 気のせいだろう お互い知り合いじゃねーのに。。

「ああ 今日なんて最高な一日なんだろう」

と海斗は一人の世界にはいりこむのでした

はん？最高の一日だと！ さっきまでは 俺の胃に穴をあけるのかというぐらいピリピリさせていたくせに。。。 子猫ちゃんを見た瞬間 なんなんだよ このかわりようは。。

いや でも 今日 あの子猫ちゃんがこの駅にきてくれて ほんとよかった。。。涙

それにしても あの子猫ちゃん どーっかで見た事あるんだよね。いや きのせいかな？

と一人考え事をしている由貴夜をよそに 海斗はまさに今、暴走しようとしていた

その瞬間

運命はまわったのだ！！！！

気づいたときには おそかった

後に由貴夜はそう語る

ガシッと 女の子の腕をつかみ ひきとめる



「!!!!!!????? あ の なんですか？」

いきなり腕をつかまれ驚き 反抗しようとして振り返った

そこには美形Aがいたのだ すこし ラッキーとか思ったのは優里  
だけではないだろう

茜も あっ 美形!と 心のなかで少しおもっていたのだから。。

「あ。。。。」

ニコニコした美形Aにとまどいつつも といかけると

「はい。」

とさらに2倍の笑顔で返事をしてきたのだ

が はいの一言

会話が続くはずもなく。。

しかし 男の手はゆるむどころか少し強く優里の腕をつかんでいる

若干痛いのか 優里は顔をしかめるが 美形Aはニコニコしたまん  
まだ

「あ の 痛いので手はなしてもらえますか？」

やっと美形Aは手をはなしたかとおもえば 今度は 手を握りしめ  
てきたのだ。。

「「！！！！！！！！！！」」

男の意味不明な行動に優里と茜は焦り始めてくる

「あの？」

と根気づよく問いかける 優里 曲がりなりにも目の前の男は優里の大好きな美形。。。

「あなたの名前は？」

いきなりまともな会話が始まるのか！？とおもい しぶしぶ真面目に答える優里

「優里ですけど。。。 かくいうあなたは？」

「優里さん。。。 素敵な名前ですね 僕は東城海斗です K高校3年のオックスフォード進学予定です。優里さんは制服をみるかぎりN学園の生徒ですね。ここから遠いですけど このへんにすんでるんですか？」

「え？ いやT市に住んでますけど」

「ああああ！ 僕と同じですね やはり運命かんじます」

運命かんじます！ その一言で なにやらしい予感がしない優里は茜とアイコンタクトをとり

その場をさろうとしたが 未だに海斗という美形Aは優里の手をに

ぎったままなのだ

しかも 恋人つなぎ。。。

目の前にいる美形の言葉をなんとかして止めようとしたが遅かった  
そのきれいな顔から発せられたのは なんと 愛の告白だった

「あの 僕と付き合ってくださいませんか!?!」

安西優里16歳 初めての告白に動揺し 固まってしまい頭が真っ白になった優里に  
海斗は勝手に アドレス交換をはじめ 学校に迎えにいつてデート  
しましょう など  
どんどん語りかけ 時間なので失礼しますね 明日あいましょうね  
といい去っていった

呆然とする優里に

茜は「おつかれ」というのでした

茜にひきづられ 優里はなんとか家に帰宅したのでした

「おかえり 優里」

「秀ちゃん。。。今日待ち端で美形に告白された」

「へー よかったじゃないか で 付き合っの?」

「いや なんか あの美形と付き合つと大変なことになりそうだから付き合わないとおもうけど。。。」「

「けど?」

「いや なんでもないや」

「まあ なんでもないならいいけど 優里 お前 なんだかんだ地味な男がすきだもんな  
まあ がんばれー」

「んー」

そして その日の夜中

由貴夜からの電話

『秀! やつと 子猫ちゃんみつかつて 俺 俺 俺 あの地獄から抜け出せると思うと幸せだよ』

と涙声で電話がかかってきたのだ

「そうか よかったじゃないか」

『いやほんと なんだかんだ1ヶ月すまん』

「別にかまわん」

『まあ あの子猫ちゃんには悪いけど あの馬鹿の相手になつてもらう。。。』

あつ お前 妹いたよな あの馬鹿みたいな変な男にひっかからないよう気をつけるようにいとけよ!』

「ああ じゃな 俺ねるわ」

『すまん　またな』

まあ　気をつけるよういったところで　妹には関係ないだろうな。  
。

そつおもいながら　秀は眠りにおちるのですた

人生が変わろうとする日。(後書き)

はい

よんでくださって ありがとうございます

プロット無しの 修正なしの一回書きの話3つめです

何度もいいますが 矛盾上等 自己満足のお話なので、

それでも 楽しんでくださると嬉しい限りです

## 衝撃

『good morning my sweet y? 昨日は楽しかったよ』

今日も楽しみにしてる。学校まで迎えにいくのか? それとも駅で待ち合わせ?

僕の優里はどこにいきたい???』

優里は朝から届いたメールに固まってしまった

そつだ。

昨日 あれよあれよと 勝手にアドレス交換されたんだ。。。。

学校にて、

「あーっはっはっはーっ ひいひい ウケる」

2 - Aの教室にて 3 Bの生徒茜が爆笑している

「僕の優里。。 つぶ」

「my sweet y? つつて いやいやいや」

「送迎ありのメール。。。 どんだけやねん。。。 あの美形。 あははは」

茜は一人爆笑している

「茜さん・・・笑えないよ。まじで」

「まあ 当事者からするとね。。。仕方ない。でも優里の好きな美形じゃん  
いいじゃんいいじゃん」

「よくないよ！ メールはこれだけじゃないんですよ！ 1通も返事だしてないんです  
なのに・・・」

と 優里は茜に今日午前中だけで受信したメールをみせる

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗

工藤海斗



「うわ。。。 工藤海斗ばつか。。。」

顔がひきつる茜

クラスメートの友人も ドン引きしている

「で内容が・・・」

『どうしたの？忙しいの？』

『調子でも悪い？』

『ああ そうだ 今日僕の友人とWデートしよう！いいだろう？』

『いや 無理だったらいんだ』

『昨日一緒にいた友人もつれてきていいよ』

『優里の友達は僕の友人だからね』

『おーい？僕の優里？返事ほしいな』

『今 何してる？僕は大学に送るエッセイを書いているよ』

『ああ 今日4時に駅でいいかい？』

『もしかして 迎えにきてほしいのかい？』

『いいよ 何も言わなくてもわかるよ 迎えにいくよ 学校の正門でまってるよ僕の優里』

e t c . . . . .

1 通もおくつてないのよ！ 僕の優里って いつからこいつの所有者になったの！ってはない

ちよつと やばくない?????????」

メールの内容にクラスにいた人全員 顔をひきつらせていた

「優里。。。 私 教室帰るわ。。。 うん あ！今日一人で帰つてな！ うちよつと用事あんなん。」と 逃げるようにさつていった茜

「ねえ。。。 委員長。 小島君 うららちゃん どうしよう。 どうすればいい?????」

「あーー 安西さん とりあえずシカトし続けるとか？」

「委員長。。。 昨日からずっとシカトし続けてるんですけど」

「いや ほらさ リンゴ病かもしれねーぜ？熱しやすく冷めやすいつてやつ。。。」

「小島君 秀ちゃん あっお兄ちゃんなんだけど・・・秀ちゃんの

周りって美形多いのね

その人たちの恋愛の話をきくかぎり 骨の髄まで彼女は愛されてるのよね。。 たまにメールするんだけど 大変そうなのよね 浮気のう もないらしい。」

「えーつと 優里……。御愁傷様??? でも 美形でしょ? K高校だっけ?

じゃあ 周りがほっとかないんじゃない? 深く考えちゃ駄目よ」

「そうよね 美形でK高校なら 周りがほっとかないよね ええ」

少しポジティブになったところで 優里は次の授業の準備にロツカ  
ーへとむかった

優里のいないところで

「たしか 小島君K高付属出身よね じゃあ 工藤海斗ってしてるんじゃない?」

「しってるどころか 有名すぎるんだよ。 K高校の王子だぜ? さっきは何もいわなかったけど

あの人 ホモじゃないのかって噂だったし あっ でも 親友の由貴夜さん曰く違うらしいけど」

「王子? 別人じゃなくて?」

「あつ 僕もその話してますよ K高校の王子はカリスマ性がな  
んとかで」

「そうそう 俺 なんだかんだ憧れてたからな。。。」

「でもメールの工藤海斗じゃ。。。」

「まっ 別人だよな？」

「だといいね うん」

「でも モノホンならやべーかもな」

「なんで???」

「そうだよ 何がやばいのさ?小島君」

「いや K高校の生徒ってさ まあ エリートだらけで人間不信が  
若干あるわけよ

「なんだかんだ金持ちの子息ばっかだし? でまー 一度懐にいれる  
と。。。言わずともな」

「「.....やばいじゃん」」

「ストーカー対策のなんか渡すべきか？」

「そうだな 今日 ハンズに行くか。。。」

「今日 早退しようかなー」

と 今日の放課後をいかに避けようかを必死に考えていた

## 衝撃（後書き）

はいはいはい プロットなしの自己満足小説第4弾

楽しんでいただけたでしょうか？

文章能力にかんしては 言わずともな。。。 ということで

内容を 何があつたかとかを 脳内変換でたのしんでくれたらなと。  
。。。

はい

次もよろしくおねがいします

## 5 (前書き)

いつものプロットなしの場合たり小説~~~~

じーーーーー！。

カタカタカタ

じーーーーー！。

カタカタカタカタ

じーーーーー！。

カタカタカタカタカタカタ。

（先輩 あそこ すごいっすね）

（後輩よ。私らはなにもみていない）

（そう 私らは何も聞いてもない）

（そうよ 先輩 何もいってもいけないわ）



「あー。工藤さん」

「海斗ってよんでよ」

「いやいや 工藤さん 私バイト中なんですよね」

「しってるよ だから 今まってるんだよね 君が終わるの」

「いやいやいや。関係者じゃないですよね？」

「僕？この取引先の会社の社長の息子。無関係とはいいがたいかな？」

「いやいやいやいやいや。そんな人がいると 他のかたに迷惑かかるでしょう？」

「そう？ じゃあ はやく仕事終わらしてデートにいきつよ 万事解決！」

「いやいやいやいやいやいや。私にも事情というものがですね・・・」

「僕彼氏だよね？ 何か問題でも？」

「いや だから・・・」

「もう 照れちゃって 優里は恥ずかしがりやなんだから！」

「（もう 死ねよ コイツ。。。）」

仕事上がり。。。。

「さっ 今からデートだね！ 僕の家にもいつてみるかい！？？」

「ないよね。ほんと。普通に実家直行だから ばいばい」

「おくつてくよ？」

「いや 大丈夫。 秀ちゃんが迎えにきてくれるから」

・  
・  
・

・  
・  
・

・  
・  
・

「秀ちゃん？？？」

「そっ 秀ちゃん。」

「僕というものがあいながら 男？」

「いや というか うちら 付き合っていないよね？」

「！！！！ 僕の妻になってください！！」

「いつきにそこかよ！ ひくし。」

（てか ほんと 何？ まじ むりなんだけど・・・）

## 5 (後書き)

中途半端にあげちゃいます  
ごめんなさい。

## 兄視点。ネタバレ注意。

俺の妹は中の上な外見をして  
性格は普通、成績も普通  
ごくごく普通の女の子だ

ただ あいつは 外国語習得が異様にすごい。

俺の成績は正直悪くない むしろ上位に組み込むほどだ  
しかし 妹の英語だけはかなわない。

学校での英語論弁大会も、クラスの英語の課題もいつも妹にやらしている

俺が出来ないわけじゃない。 妹が好き好んでやるんだ  
別に 俺が頼んでいるわけじゃ。。。

まあ そんな 俺の話はおいといて

由貴夜の忠告を真に受けなかった俺が悪いのか  
妹の悪運を恨むべきなのか  
俺にはわからない

しかし

K高校のカリスマ王子ともいわれる男 工藤海斗が まさかの妹に  
ぞっこん。

いや 人様の恋路を馬鹿にするわけではないんだ  
だがな

自分の平穩に少しでも邪魔がはいるのだったら まー なんと  
いうか 考える

由貴夜にいったところで あいつは 工藤海斗のあしだ  
(そういつたら この前 愚痴を永遠ときかされたが・・・)

とりあえず

工藤海斗には困っている。

なぜって？

俺と妹は 珍しく大変仲がいい。

何かあるたびに

妹は

「秀ちゃーーん」

と泣きついてくるのだ そして たいてい その場に工藤海斗もいる  
俺と妹は怪しい関係ではないのだ

ただ 珍しく 仲がいいんだ いいだけなのに

毎回 妹が泣きついて抱きついてくるたび

工藤海斗の目が すごいことになっている

そして シックスセンスなんてもの存在しないが

その なんていうのだ？ あいつの後ろから 黒いオーラのような  
ものが。。。。

正直 今では まあ 慣れたが 慣れた今でも正直つらいものがあるが

とりあえず このカップルはトラブルメーカーなのだ 俺にとって  
かわいい妹のため と一度だけ 破局させようと努力したが そんな  
努力 するべきではなかった

俺の友人達を味方にひきいれ やつは 俺に対抗してきたのだ。

工藤海斗はどうでもいいとして

親友から 色々いわれるのは 少な

まあ付き合う付き合い合えないは 本人達にまかそう

（そう促すと妹は 裏切り者ー といって1週間弁当つくってくれ  
なかった）

まあ 今

いつもの状況に陥っているわけだ

妹と工藤海斗はこの前 ようやく付き合い始めたのだ  
ようやく。。。

妹は あれは ちがうの！ などとぼざいているが もう どうで  
もいい

いやいや 話を戻そう

つで なにがあったか それは 妹の進学先だ。

妹はフランスかイタリアの大学にいききたいそうだ。

そして 願書もだし 合格通知も届いた。

しかし 身に覚えのない合格通知も届いたらしい  
どこかって？

言わずともな

工藤海斗の通う オックスフォードからさ。

世界屈指の大学だろう？ 親が感激して さつさと手続きすませ

本来 妹のいきたい大学ではなく 工藤海斗のごりおし というか

勝手に妹の進学先がイギリスにかわってしまったて

いま そのことにたいして 俺にぐちぐちいっていきただ

正直 妹がフランスかイタリアの大学にいききたいといった理由が理

由だから 正直どうでもいい。

もう むしろ 迷惑かかりまくっているので

さつさと海外にでもどこでもいってくれとおもう

日本にもどってこないでほしい

それほどまで 俺は迷惑を被っているのだ

だから ぼそつといってやったのさ

「もう諦めて嫁にでもいけばいいのに」

じゃー 二人とも地獄耳で

速攻 二人が同じタイミングで

「そうだね いますぐにもで籍をいれようか！」

「秀ちゃん！？そんな冗談やめて 私に不自由な生活を未来をおくらそうっての？」

「息そろってまー 仲がいいことで」

「そうなんだよ」「ちがう！！！」

もう このやりとりにも いい加減飽きてきた

とにかく このカップル いや どうせ 妹が大学卒業するまでに は籍いれて

そして 大学卒業したころには 子供とかできてそうだな  
いや あるいは 監禁状態な生活を強いられてそうだな  
そう妹に笑っていったら

秀ちゃんそれ 笑えない。

と顔を真っ青にして 俺の部屋からでていった

↓数年後↓

妹が大学を卒業する1年前に 入籍の知らせが届いた  
これには 妹に同情したな

なぜって？

大学のサークルで仲良くなった男友達に嫉妬したやつが 責めに責



めて

入籍せざるおえなかったらしい

いや 妹は大学休学してでも やつから逃げたらしい

が ここは やはり天下の工藤様。世界を牛耳る工藤家にとって  
赤子をひねるまでもなく

簡単に 妹をみつけたし

妹は逃げ切れなかったらしい

俺の予測どおりだなと 笑っていうと

妹に睨まれた

ここまではいい

しかし

同い年である 工藤海斗に

「お義兄さん」

といわれた瞬間 俺は 笑えない状況に自分もいるのだと きづいてしまった。。。

妹よ。

なぜあやつに捕まった!?

俺だって 平凡の未来がほしいんだぞ!!!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4250/>

---

探し物は何ですか？

2011年11月26日19時46分発行